

蟻塚

茶色い平原に無数に盛り上がっている蟻塚

神経を研ぎ澄まし
耳をそばだてると
物のこすれるような
砂同士がこすれたような
微かで
微小な
しかし膨大な数の
そして隙間の無い
音が
マイクロな波が
伝わってくる

その壁に掌を当てると
その壁を構成する砂の
ひとつぶひとつぶの振動が
微妙に重なり合い
互いを増幅させるような
干渉効果を生じさせること無く
あたかも
点描法による絵画のような
色彩を伝えてくる

その壁に耳を当てると
1オングストロームの間隔で
さわさわという微小な音が
聴き分けられるような気がする
それでいて
ひとつのmassとして動いているような
そんな錯覚さえ起こさせる
そのような音なのである

その中で蠢く者を覗くことは
あまりに恐ろしく
僕は後ずさりする

しかし

誘惑には勝てないものだ

僕は棍棒を手にし

渾身の力を込めて振り下ろした

蟻塚はぱっくりと口を開け

右往左往するシロアリが

ぞろぞろと

強烈な日差しの下へ溢れ出た

その一匹一匹が

シナプスのように連結されているのを

僕ははっきりと見た

伝達物質のようなもので

空間を越えて連結されているのを

僕は諦めざるを得なかった

その蟻塚を木っ端微塵にすることを・・・

(2009.2.18)